二〇二一年一二月一一日

宅配夫夕を小走り十二月　小袖

宿木の緑際立つ冬木立　はく子

流木を拾ひあつめて浜焚火　小袖

大いなる枯野の中に朱雀門　宏虎

焼芋は新聞がみのなかにこそ　はく子

落葉掃く音大仰に竹箒　うつぎ

日矢のさす沖にエリ漁の杭延ぶる　凡士

放棄田を覆ひ尽くして枯尾花　かかし

寒の菊翳重ねあひ花あまた　素秀

年の市鈴つく鍵の落し物　なつき

タンカーの動くともなく沖春凪　よう子

炊き込んで家族を待てるおでん鍋　わかば

頬かむり解きて漁村の喫茶店　うつぎ

迫りだして水漬くばかりや照紅葉　むべ

落葉焚き今が佳境と手招きす　小袖

通夜の客窓開けて見る冬の虹　なつき

と見る間に芝生白変あられ降る　こすもす

子らに聞く大いなる夢暖炉燃ゆ　うつぎ

毎週句会秀句・みのる選・二〇二一年一二月一二日